みんなで「明日」をとどけよう！

皆さんは新美南吉の「明日」という詩を知っていますか？

南吉といえば､「ごんぎつね」など悲しいお話を書いた作家と思われるかもしれませんが、「明日」は未来への希望に満ちた、とても明るい詩です。

新型コロナウィルスで先行きが見えず、不安を抱え、元気をなくしている人が多い今、お家でこの「明日」を朗読して動画に撮影し、Twitter で発信してみませんか。

朗読にメッセージやあなたらしいパフォーマンスを添えたら、ハッシュタグ「＃明日をとどける」をつけて発信してください。

あなたの声で、みんなに〝明日〟をとどけましょう！

〇南吉の詩「明日」を朗読して動画に撮り、Twitter にあげてください。

※Twitter のアカウントがない方は You Tube や Instagram でもどうぞ。

〇よろしければメッセージやパフォーマンスも添えてください。

〇映像ではなく音声だけでも結構です。

〇ハッシュタグ「＃明日をとどける」をつけてください。

〇ご自身で作曲して歌うのもＯＫです。

※既存の曲は作曲者に著作権がありますので無断で使用しないでください。

※詩の改変はしないでください。歌にする場合は言葉を繰り返す程度にしてください

〇公序良俗に反しない内容にしてください。

〇作者が新美南吉だとわかるように名前を読み上げるか、投稿欄に書いてください。

〇詳しくは新美南吉記念館のホームページをご覧ください。投稿した動画も見られます。

明日（あした）

新美南吉（にいみなんきち）

花園（はなぞの）みたいにまっている。
祭（まつり）みたいにまっている。
明日がみんなをまっている。

草（くさ）の芽（め）、
あめ牛（うし）、てんと虫（むし）。
明日はみんなをまっている。

明日はさなぎが蝶（ちょう）になる。
明日はつぼみが花（はな）になる。
明日は卵（たまご）がひなになる。

明日はみんなをまっている。
泉（いずみ）のようにわいている。
らんぷのように点（とも）ってる。

※「明日」は雑誌『赤い鳥』昭和 7 年 10 月号に入選した新美南吉(当時 19 歳)の詩です。選者の北原白秋はこの詩について“童謡では、新美君の「明日」がよろしい。清新でもあり、香気もある（後略)”と評しました。

新美南吉記念館（にいみなんきちきねんかん）
〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町 1-10-1　TEL0569-26-4888

明日への希望を託した詩

人類はこれまでにも多くの感染症と闘ってきました。新美南吉が5歳から7歳の頃にはスペイン風邪が世界中で猛威を振るい、戦後に特効薬が普及するまでは常に結核が日本人の死亡原因の一位でした。

南吉もまた早くから結核に苦しみ、29歳7か月で亡くなりました。4歳の時に亡くなった実母の死因も結核だろうと言われています。

当時、有効な治療法がなかった結核に罹れば死を意識せざるを得ませんでした。南吉は20歳で初めて喀血していますが、その兆候が表れた日の日記には「死ぬのは嫌だ。生きていたい。本が読みたい。創作がしたい。」（昭8・12・6）と怯える気持ちを綴っています。

結核の辛さは死の恐怖だけではありません。他人に感染させてしまう心配、職場を追われる不安、そして人々から避けられる孤独感も深刻です。

実際、ふるさと岩滑の年輩者からは「畳屋（南吉の生家）の前は息を止めて通った」という話が聞かれます。また、亡くなる間際の南吉が安城高等女学校の同僚教諭に宛てた手紙では、皆が僕の病気を毛嫌いするなかで、あなただけは分け隔てなく接してくれたと感謝の気持ちを伝えています。

新型コロナウィルスの感染拡大以来、患者を出した家庭が世間から厳しい目を向けられ、患者を救うために必死に働いている医療従事者の子どもが差別を受けているという報道を目にします。

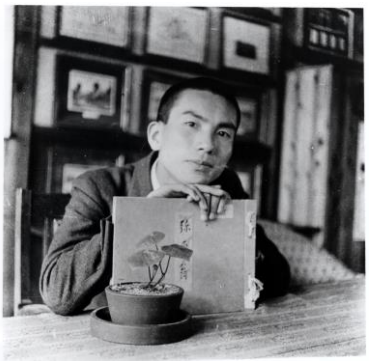
自分だけは、家族だけは助かりたい、そう思ってしまう弱さは人間誰しも持っています。しかし、その気持ちをむき出しにして誰かを責め立てれば世の中は分断されてしまいます。南吉はそうした人間の弱さを描き、この世を「無限の闇」（「蛍のランターン」）に例えました。その一方でランプや蛍を好んで描いたのは、その小さな明かりに、煩悩に囚われた〝無明長夜〟のような人生を照らす希望を託したからです。

その〝小さな明かり〟とは、ひとりひとりが自分のエゴの深さを見つめること、そして生けるものが等しく持つ命の尊さ、美しさに気づくことでした。そうすれば、互いに尊重しあう明るい未来を信じることができると考えたのでしょう。

そんな南吉の明るさが表れた作品はいくつもありますが、なかでも希望に満ちているのが19歳のときに『赤い鳥』昭和7年10月号に入選した詩「明日」です。

ぜひ、あなたの声で、南吉が明日への希望を託した詩をみんなに届けてください。

新美南吉記念館



新美南吉（にいみなんきち）

児童文学作家・詩人。大正２年７月30日、現在の愛知県半田市岩滑（やなべ）に生まれる。本名正八。４歳で実母を亡くし８歳で実母の実家に養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。中学生の頃から童話や童謡を書き始め、18歳で「ごん狐」が『赤い鳥』に入選。東京外国語学校の学生時代、北原白秋に師事して文学修行に励むが病により帰郷。安城高等女学に教師として勤めながら創作を続け、昭和17年に第一童話集『おぢいさんのランプ』を出版。翌年３月22日、結核により29歳７か月で死去。死後、同門の詩人巽聖歌らの尽力により作品が広く読まれるようになる。